

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ文字の世界

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5556

八杉佳穂

Yoshiho YASUGI

マヤ文字の世界

その不思議な文字でもって歴史や宗教をしるしていた時代の古典期マヤ社会は、適切さに欠けるかもしれないが、ちょうど戦国時代のクニの集まりのような世界ではなかったかと、最近私は想像している。それぞれのクニには領主がいて、隣のクニと争ったり、嫁取りをしたりする世界は、戦国時代さながらである。そんなイメージをもつに至ったのは、一つ

にはマヤ文字の解読が進んできて、マヤ社会が文字からおぼろげながらも描かれるようになってきたからである。とはいえ、マヤ文字はまだ完全には解読されていないので、マヤ文字について述べようと思っても、漢字のようにうまくいかないのであるが、まず材料、書き方など、文字にまつわる問題を取りあげ、こんな絵のような文字にも規則があ



1 キリグアA



2 キリグアA



り、自分たちの歴史や世界観をしるすことのできる文字であったことを示してみたい。そんな文字のなかにも、いや絵のような文字であるからこそといったほうがいいかもしれない、いたるところにマヤ人の遊び心が表われており、それもい

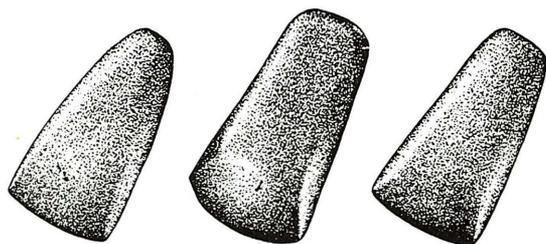


図1 (The Ancient Maya, Morley, Brainerd and Sharer, Stanford, 1983, より)

くつか差しはさんでいこう。

マヤ文字資料

マヤ文字の資料の中心は、三世紀から十世紀のマヤ文明の絶頂期である古典期に刻まれた碑文である。碑文には、石碑や祭壇、建物の入口の天井に嵌込まれたまぐさ石(リンテル)、石板(パネル)などがある。碑が刻まれた古典期という時代には、土器にも文字が描かれたり、刻まれている。壁画にも少量ながら文字があるし、骨や小さな石、木の箱などにも文字が残っている。しかし、それらの数は限られている。このほかに、十一、十二世紀以後の写本といわれる絵文書が四つ残っている。

材料

碑文をしるす材料は、マヤ文明が展開した石灰岩質のペテン地方に豊富にある石灰岩であるが、一部で砂岩や凝灰岩が使われている。文字をしるすための道具は、火打石(チャート)のみで、細部

はおそらく黒曜石を使って仕上げたものと思われる(図1)。石に石で刻んだわけであるが、石灰岩というのは取り出したときはやわらかく、徐々にかたくなるので、文字は刻みやすかったのである。しかし刻みやすかった分、風化しやすく、残念なことに、ペテンで発見された石碑には、細部が識別し難く、読めないものがたくさんある。一方凝灰岩は、最初からかたく、文字を刻むのに苦労したことであろうが、その分、文字はよく残っている。



3 キリグア E



図2 (The Ancient Mayaより)

石碑は遺跡の近くの石切り場から切り取られ、遺跡の中心部まで運ばれ、適当な位置に立てられたのち、文字が刻まれたと推定されている。

文字は、最初線を引き、大体のますめ

をこしらえてから、切り刻まれた。線が引かれたあと、途中まで文字が刻まれたものや、線だけ引かれたものが発見されているからだ。そうした線や文字ますの大きさをみると、線は直線ではないし、それぞれのますの大きさが異なるので、定規などで引かれたとは思えない。それらはみないい加減であり、マヤ人は物差しで、きちつと物事を計って記録することなど思いもよらなかったとしか思えない。その一方で、ほとんどまちがうことなく時を計っているのであるから、何ともアンバランスな感じがしてならない。

土器や壁画の文字は何で書いたのか、その証拠となる遺物はないが、文字のやわらかさからみて、筆が用いられていたことはまちがいないであろう。直接の証拠遺物はないものの、ティカルで出土した骨には、筆を持っている美しい手が描かれている(図2、右上写真)。

絵文書は、いちじくの木の繊維からこしらえた紙を石灰でコーティングして、そのうえに書いたものである。文字の色

は、土器や壁画と同じく、黒である。絵文書の文字は細く、小さく、しかもかたい感じがする。そのため、おそらく筆ではなく、先が若干平たい竹ペンのようなかたいもので描かれたものと思われる。

字体

多くの文字には幾何体と頭字体がある。



4 コパン



6 コパン石碑C



5 コパン石碑D

幾何体		頭字体	
1			「96文字碑文」
	「96文字碑文」	「96文字碑文」	
2. a			「96文字碑文」
	Orator	「96文字碑文」	
b			「96文字碑文」
	木箱	「96文字碑文」	
3. a			
	ヤシュチラン リントル43		
b			「太陽の神殿・脇」 「96文字碑文」
	「太陽の神殿・脇」	「96文字碑文」	

図 3

頭字体は人や動物の頭をかたどったものである。幾何体のほうは、何を表わしているのかよくわからない幾何的な模様の文字である。両者は同価であるが、その関係は図3のようになる(図3)。

1は、両者の関係が一見ただけではわからないものである。生起場所の比較から、両者が同価のものとわかったものである。2は、幾何体の弁別要素を頭字のなかに持っているもので、aは弁別要素の一部を頭字の中に取り入れたものであるのに対し、bは全体を取り込んだものである。3は、幾何体の一部をかえて、

頭文字にしたものである。aは左側を顔の形にかえただけであるが、bは目や鼻を加え独自性が強くなった例で、二に分類してもよいかもされない。

このほかマヤ文字の複雑さの極致ともいえる、全身像で描いた全身体とでも名づけられるものがある。これは暦の文字に用いられており、少しくらいわからなくても、前後の日付から計算して同定できるものであるが、どこかに識別できる特徴を持っている(写真・コパン石碑D)。

文字の書き順

図3からわかるように、頭文字の向きは左を向いている。それゆえ、左から右



7 ティカル神殿



に読まれる。しかし時に右や上を向いた文字がある。テキストが右を向いた文字で構成されていると、当然のことながら、それらは右から左に逆に読まれる。上を向いたものやひっくり返った文字は、違った意味を表わす別の文字として機能している。

文字はふつう主字と接字から成り立っている。主字は文字を構成する大きな要素であり、接字はそれについて生起する小さな要素である。これは文字を構成する文字素の大きさの違いによる分類である。大きさを問題にしないときは、文字は文字素からできているとみることにする。

頭文字の左に接字がついている場合、接している部分を見ると、接字のほうのくっついている部分は、主字に侵食されて描かれていない場合が多い。それに対して主字は完全に描かれている。これを見ると、主字をさきかき書かないと、うまく書けないことがわかる。ということは、左から右に順に文字を書くことができな



8 ティカル石碑12



9 ティカル石碑16

いわけである。主字をさきかき書かないことには、接字をうまくそれにくっつけて書くことがむずかしい。もちろん、左から順に書いた例もあるし、書けないことはないであろうが、実際に書いてみると、



10 ティカル石碑3



11 ティカル石碑29(97ページ参照)

やはり、左から接字を書いて次に主字を書くより、主字をさきに書いたほうが、書きやすいのである。

では主字はどこから書きはじめたのであろうか。碑文の場合、文字は彫られたものであり、どこから書いたのかよくわからない。土器や絵文書の場合は書いたものであるから、どこから書いたかわかりそうなものであるが、なかなかうまく書いてあり、これもどこから書いたのか

わかる例は少ない。外枠から書いたことはまちがいないが、では外枠はどこから書きはじめたのだろうか。よくみると、右上あたりから左に書いていったように思われる。実際に書いてみても、それが一番書きやすいので、たぶんそうしたにちがいない。しかし左上から左下を通り右下に行き、半分を書き、左上から右上を通り右下に二筆で書いた例をマドリッド絵文書にみることができる。案外書き順

には定まった規則はなかったのかもしれない。

文字の書き方の違い

接字と主字が結びあつて、これが一つの文字ますに納まって、一つのまとまりのある単位を構成している。頭字体と幾何体は自由に交替するが、接字と主字はそうではない。これは意味や文法と関係している場合が多いからと思われる。し



12 マドリッド絵文書103ページ(101ページ参照)

かし意味を変えず、接字が主字のなかにはいつたり、一つでいいものを二つ重ねて書いたり、書き方にはいろいろちがいがみられる(図4)。

1-aは、三つの文字素から成り立っている。1-bは、1-aにみられる左の接字が額のところに取り込まれた文字であるが、1-aのように半分ではなく、全部書かれている。1-cは、主字が幾何体にかわつたものである。下に生起している下接字は、向きが異なっているの

で、どちら向きでもいいことがわかる。これらの文字は、いずれも前の日にある日数を足して、次の日を導くときに用いる文字である。

2-aは四つの文字素から成り立っている。b、cは主字を頭字体にしたもので、cでは、aの文字の左の文字素の黒を表わす格子状の要素が、主字の中にはいつている。これは三六五日曆という曆のチェン月を表わす文字である。a、cの主字の上の結びを表わす文字素は、b



13 古典期後期の壺(103ページ参照)

の例からわかるように、省かれうる。暦の文字には、主字の下にみられる三つの丸がつくことが多いが、つかななくてもいい。それゆえ飾りの要素とみることができ、暦の文字であることを示す文字素とみることも可能である。

3ならびに4のaとbをくらべると、aの右にみられる右接字が、bでは主字の中にはいっていることがわかる。2の例と同じように、接中文字化される例であるが、2のように弁別要素だけが接中文字化されるのではなく、接字全体がそのまま接中文字化されている。

5、6、7は、主字を二つ並べたり、半分にしている例で、8、9、10は接字の一部を省いたり、二つ重ねた例である。11のaはG8、bはFとなづけられた文字である。cはFの真ん中の文字素の中にG8が取り込まれた文字である。

12は、死を表わす文字といわれているが、b、c、dは、aの右にある文字の左接字の中に主字を取り込んで、融合した例である。

13、14は二文字を一文字に圧縮した例である。13|bでは、ムアン鳥とみられる頭字体の頭部をうまく利用して、aの二文字を一文字で書き表わしている。因みにこれはボナンバックの王の名を表わす文字である。14|bでは、aの最初の文字の主字が省かれている。これはカトゥンという期間を表わす文字であるが、上接字だけで十分弁別できるために省かれたものと思われる。

15はパレンケの大王パカルを表わす文字である。a、cでは楯（パカル）の表意文字が左下にみられる。bは楯を頭字体にしたもので、目のところに楯が描かれている。それぞれ楯の上または前についている文字素は称号で、マフキナと読まれている。cの右には、ちょうど振り仮名をつけたように、パカルを表わす音節文字パ、カ、ラがある。d、e、fはそのパカルを表わす音節文字を、幾何体で書いたり、頭字体で書いて変化させたものである。dではいづれも幾何体で表わしている。eはカを頭字体にしたもの

で、fではパを頭字体で書いている。

同じ文字を繰り返して使うことはマヤ人の美学に反したようで、テキストには同じ文字が繰り返して生起することはまれである。我々が文章を書くときにも、注意事項として同じ字句を繰り返すなどいうのがあがるが、修辭的にはいいのかもしれないけれど、解読の場合には、かえって問題をむずかしくする原因の一つとなっている。

読み順

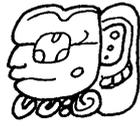
一つ一つの文字の構成をみてきたわけであるが、ではテキストはどのようなになっているのであろうか。マヤ文字の読み順はたいへん変わっている。二列を対にして、左、右、左、右と上から下に読んでいくのである。このような読み順がどうしてできたのかをまず考えてみたい。

暦をもつ最初の資料は、西暦二九二年に相当する日付を刻むティカルの石碑二九号である(写真11)。暦の文字が縦一列に書かれているが、途中から碑は破損し



c
テイカル
神殿4号
リンテル3

3



a
ヤシュチラン
リンテル30

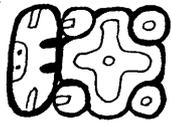


b
キグアア
石碑K



b
チチェンイツア
23

7



a
ドレスデン 絵文書 46頁



b

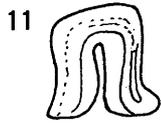


a
パレンケ
奴隸板

10

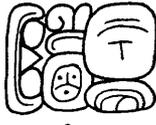


b
ナランホ
石碑22

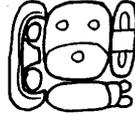


a
コパン
石碑2

11



c
ヤシュチラン
リンテル27



d
サントン石碑2



b
パレンケ
碑文の神殿
中央パネル



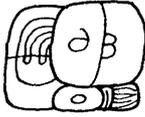
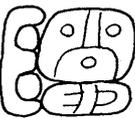
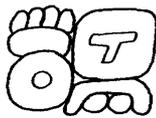
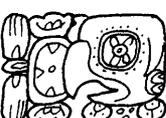
f
パレンケ
宮殿
南正面

ており、下部は消失して不明で、参考にならない。二番目の資料はひすいに彫られたもので、現在ライデンにあるところから、ライデン板といわれている(三二〇年)。これを見ると、暦の大切な部分は大きく縦一列になっているが、下のほうは二列になっている。一つの文字の大きさを二つのますに分けたわけである。この部分をどのような順で書いたらいいのか、

おそらくマヤ人は悩んだにちがいないが、左、右と読むのがいちばん理に当たっていることから、そのように書き順を決めたものと思われる。三番目はワシヤクトウンの石碑九号(三二八年)、四番目に古いのは同じくワシヤクトウンの石碑一八、一九号である(三五七年)。いずれも最初に暦の導入文字が二ます分の大きさで書かれている。その下に二列に文字が書か

れているところから、ライデン板と同じように、一つの文字の大きさを二つに分けたことで、その二つ分を読む必要上、左、右と読んでいったと推定できる。これでは不思議な読み方の成り立ちが推定できたのであるが、この読み方は一五世紀の作といわれるマドリッド絵文書にまで一貫して続いた。

読み順がわかったのは、おもに暦の文字のお蔭である。暦はいくつかの異なる周期を組み合わせたもので、その仕組みえわかれれば、少々不明な文字があつたとしても、前後から計算で導くことが可能な体系である。それでまず暦の仕組が解明され、それらの文字が解読されたわけである。全碑文の約三分の一を暦の文字がしめており、いかに暦が大事であつたかわかるであろう。

- | | | | | |
|--|---|---|--|--|
| <p>1</p>  <p>a</p> <p>パレンケ
碑文の神殿
西パネル</p> |  <p>b</p> <p>コバン
祭壇Q</p> |  <p>c</p> <p>パレンケ
碑文の神殿
西パネル</p> | <p>2</p>  <p>a</p> <p>パレンケ
階段碑文</p>  <p>b</p> <p>パレンケ
碑文の神殿
東パネル</p> | |
| <p>4</p>  <p>a</p> <p>70頁</p> |  <p>b</p> <p>ドレスデン絵文書
74頁</p> | <p>5</p>  <p>a</p> <p>キリグア
石碑C</p> |  <p>b</p> <p>ピエドラス・ネ格拉斯
石碑8</p> | <p>6</p>  <p>a</p> <p>パレンケ
宮殿板</p> |
|  <p>c</p> <p>ドレスデン絵文書
46頁</p> | <p>8</p>  <p>a</p> <p>キリグア
石碑C</p> |  <p>b</p> <p>キリグア
石碑D</p> | <p>9</p>  <p>a</p> <p>キリグア
石碑E</p> |  <p>b</p> <p>キリグア
石碑E</p> |
|  <p>b</p> <p>ピエドラス・ネ格拉斯
石碑25</p> |  <p>c</p> <p>パレンケ
葉の十字の神殿</p> | <p>12</p>  <p>a</p> <p>トニナ
メキシコ国立人類学博物館蔵</p> |  <p>b</p> <p>トニナ
記念碑69号</p> |  <p>b</p> <p>トニナ
記念碑69号</p> |
| <p>13</p>  <p>a</p> <p>ボナンパック
石碑2</p> |  <p>b</p> |  <p>b</p> | <p>14</p>  <p>a</p> <p>パレンケ
碑文の神殿
西パネル</p> |  <p>a</p> |
| <p>15</p>  <p>a</p> <p>パレンケ
宮殿板</p> |  <p>b</p> <p>パレンケ
96文字碑文</p> |  <p>c</p> <p>パレンケ
碑文の神殿
西パネル</p> |  <p>d</p> <p>パレンケ
碑文の神殿
東パネル</p> |  <p>e</p> <p>パレンケ
碑文の神殿
中央パネル</p> |

テキストの構造と暦

ほとんどのテキストは、最初に日付があり、その日の出来事をするす文字群がつづく。普通最初は長期暦といわれる略されない暦がしるされる。最初にあることから、イニシャル・シリーズといわれることがある。これはバクトウン、カトゥン、トゥン、ウイナル、キンという五つの単位に数がついたもので、ちょうど西暦と同じように、ある日を基準にした暦である。基準となるマヤ暦元の日は、西暦紀元前三一四年八月一日という説が一番有力である。そこでたとえば、その日から9バクトウン、9カトゥン、2トゥン、4ウイナル、8キンだった日は、西暦の六一五年七月二七日となるのであるが、七月二七日にあたるのが、5ラマツト1モルと考えればわかりやすいであろう。それを次のように書く。

9・9・2・4・8 5ラマツト 1モル

因みにこの日はさきのパカル王の即位した日である。

それぞれの単位の関係はつぎのようになる。

1バクトウン || 20カトゥン

1カトゥン || 20トゥン

1トゥン || 18ウイナル

1ウイナル || 20キン || 20日

5ラマツトというのは二六〇日暦の1日で、1モルというのは三六五日暦の1日である。二六〇日暦とは、13の数と20の日が組みあわさって二六〇日で一周期となる暦である。一方三六五日暦とは、二〇日が一月となる月が18に、五日しかないワヤツプという特別な日がついてできる三六五日が一周期の暦である。

二六〇日暦の20の日にはつぎのような名と順がある。

イミシユ、イック、アクバル、カン、チクチャン、キミ、マニック、ラマツト、ムルック、オック、チュエン、エプ、ベン、イシユ、メン、キツプ、カーバン、エツナツプ、カワック、アハウ

これに、たとえば1イミシユ、2イック、3アクバルというように、1から13

までの数字が順にとぎれることなくつづくので、二六〇日が一周期の暦ができるわけである。

三六五日暦の月の名と順はつぎのとおりである。

ポーブ、ウオ、シツプ、ソツツ、セツク、シユル、ヤシユキン、モル、チェン、ヤシユ、サック、ケフ、マック、カンキン、ムアン、パシユ、カヤツプ、クムク、ワヤツプ

三六五日暦の方は0ポーブ、1ポーブ、2ポーブ……と数えていき、19ポーブとポーブ月がすむと、ウオ月に入り、0ウオ、1ウオという順になる。

ふつうイニシャル・シリーズには、このほか夜を支配する王を表わすといわれる九日で一周期の暦や、その日の月齢が何日で、その月は二九日月か三〇日月のどちらであるかなどの月の情報がしるされてる。

テキストが長くなると、前の日から何日だったか、または何日前かをしるす数があり、その数によって導かれた暦の日

があり、その日の出来事をするす文字群が生起し、それが繰り返される。

文字の意味、読みの推定

解説というのは、意味がわかって、読めなければならぬ。すでに意味がわかってる文字はたくさんある。たとえば、誕生、即位、死、捕まえる、舌に穴を開け紐をとおす儀式、王の名前、称号、都市を表わすとみられる紋章文字、などである。それらのうちのいくつかは読むことも可能であるが、ほとんどはまだ読み方がわからない。だから、どのように文字を読むかということが、現在いちばん追究されている。

文字の読みのヒントは、一六世紀にスペイン人神父のランダが残したいわゆるランダのアルファベットと、二六〇日曆、三六五日曆の文字の読みが基礎になっている。文字の意味や読みの推定には、文字が生起する場面に立つ。特にリントルや絵文書には、ちょうどマンガのように絵があつて文字があることから、文

字の意味や読みが推定しやすいのである。もっとも、全く絵から推定できない文字もたくさんある。まず例として、マドリッド絵文書の一〇三ページの上段と中段をあげてみよう(写真12)。

絵文書

上段は二つの文があり、中段には三つの文がある。それぞれ前に点と棒による数字や二六〇日曆の文字があるし、それぞれに絵が添えられているので、それらが独立した単位になることがわかるであろう。読み順は例のごとく、左、右と読み、下にうつる読み順である。

絵には蜜蜂がある。これがどこかに文字となつて表われているはずである。各文を比較すると、どうやら二番目の文字が蜜蜂を表わしているようだ。この文字の主字は二六〇日曆のカーバン(Caban)と同じ文字である。ユカテクマヤ語のカップ(Cab)という語には、「大地」という意味とともに、「蜜蜂、蜂蜜」という意味があることから裏付けられる。ただ

し中段の一番左のテキストの二番目の文字にはカップがない。構造からみて、ここにはカップを主字とする文字がなくてはならない。しかしこれは最初の文字と同じであり、同じ文字が二つ続くことはまずないので、きっと書記者がまちがえたにちがいない。大体マヤのテキストにはまちがいが少ないのであるが、マドリッド絵文書には非常に書きまちがいが多い。それに文字もくずれている。これはもうすでに退廃期である時代の作だからである。

ここで考えておきたいのは、一度書かれた文字には霊力が宿るとみる信仰である。この例はほかの世界にもある。碑文は刻まれたものであるからそうはいかないが、絵文書は書かれたものであるから、まちがえればそのうえに白を塗り直し、書き替えることが可能である。まちがいのままにしておいたのは、まちがいを直すことができなかったためではなからうか。まさかまちがいに気づかなかつたはずはない。

三番目の文字はそれぞれ中段に登場している神を表わす文字である。中段の一番左のテキストと同じ文字が上段左のテキストの三番目にある。これはイツアムナとよばれている神を表わす文字である。ところがこの文字テキストの下にある絵にはイツアムナは登場せず、イグアナのような動物がいるだけである。おまけにこの動物に相当する文字はない。この例から、文字テキストと絵が対応するとは限らないことがわからう。

マヤのテキストの最初には通常動詞がくる。これはマヤの言語の特徴と合致している。中段のそれぞれのテキストの最初の文字をみると、それぞれの要素はランダのアルファベットとほぼ同じ文字である。そこでそれにランダがしるしている音価を当てはめると、u-pa-ka-uなる。さてここまできると、今度はマヤ諸語の辞書をめぐる番である。マヤ諸語は三〇余りの言語から成り立つのであるが、絵文書はユカテクマヤ語で読むと一番理解できる。そこでユカテクマヤ語の辞書を

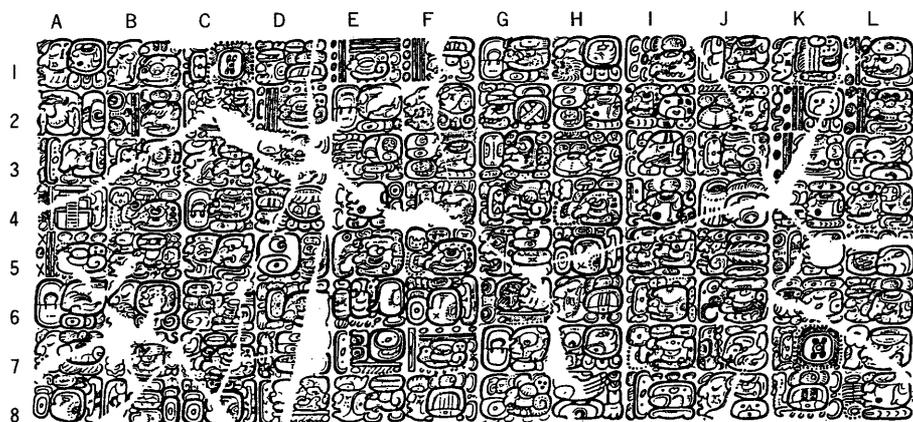


図 5

(9.11. 0. 0. 0)	127ハウ 8ヤ	A1-B1	(652 10/12)
+ 2. 1. 11		A5-B5	
(9.11. 2. 1. 11)	9チユ 9ヤク	B6-A7	(654 11/2)
+ 2. 8. 4. 17		D2-D3	
(9.13. 10. 6. 8)	57マツ 6ツユル	D4-C5	(702 6/1)
+ 19. 15. 14		E1-F1	
(9.14. 10. 4. 2)	9ヤク 5ヤク	F2-E3	(722 1/1)
+ 2. 2. 14. 5		F7-F8	
(9.16. 13. 0. 7)	9マツ 15ウ	H1-G2	(764 3/6)
+ 1. 0. 0. 0		H6	
(9.17. 13. 0. 7)	7マツ 0バシ	H7-G8	(783 11/22)
- 7		L1	
(9.17. 13. 0. 0)	137ハウ 13マア	K2-L2	(783 11/15)

表 1

めくると、バックpak「pak」には多くの意味があるが、蜜蜂に関して、「養蜂する」とか「蜜をつくる」といった意味があり、場面と一致する。上段の最初の文字のほうは、u-pa-chiとなる。pachには「所有する、殖やす」といった意味があるが、何とかこれも場面と関係づけることができ

碑文

こうして場面を手掛かりに、文字の理解が進んでいる。ところがテキストには必ず絵がつくわけではない。そうしたテキストはその他のテキストと比較しなるとなかなか理解できない。比較ができるものがないと、まずそのテキストは理解不能である。そこで今度は、絵はないものの、比較できるテキストがあつたため、何とか理解できるようにしたテキストを分析することにした。選んだテキストはパレンケの「九六文字の碑文」と呼ばれているものである。頭字体が多く、一見ただけでは歯がたちそうにない。だから例に選んだのであるが、かなり複雑にもかかわらず、比較できるテキストがあつたお蔭で、現在ではその内容がほとんど理解できる。美しさのうえで最上の部類に入るテキストでもある(図5)。

まず最初にテキスト理解の骨組みとなる日付を読みとつていこう(表1)。後期になると、長期暦をしるさず、簡便に日付をしるす碑文が多くなるのであるが、

このパレンケの碑文もそうで、いきなり二六〇日暦と三六五日暦で、12アハウ8ケフとしるしている。その次にコウモリが逆さになった文字があり、11カトウンの文字が続いている。これは11カトウンが完了した、すなわち9・11・0・0・0であることを簡便にしるした文字群である。コウモリが逆さになった文字が11カトウンという期間の完了を表わすのはどうもマヤ人のしやれ心を表わしているようだ。期間の完了というのは、その期間の役目が終わり、休みにつくところである。コウモリは逆さになって休むところから、コウモリの頭を逆さにすることで、休みを表わしているようだからである。

12アハウ8ケフのこの節の主人公は、B3にあるパカル王である。その次のA4にはピラミッドをかたどつた文字があり、B4ではパレンケの紋章文字が生起して、この節は終わる。ピラミッドをかたどつた文字の正確な意味は不明であるが、パレンケを隆盛に導き、ピラミッド

を建てた王がパカルであるので、ピラミッドの建設者といった意味が推定されている。

パレンケの紋章文字は、このほかC7、F5、H4、I7にも生起している。紋章文字のまえには人を表わす文字が生起し、日付のあとには動詞がくることをたよりに、ほぼこの碑文は解明できるのであるが、A3の文字の意味は不明である。

12アハウ8ケフから2・1・11たつた日が9チュエン9マックであることが、A5からA7にかけてしるされている。

1と11は点と棒で書かれているが、その他の数は頭字体でかかっている。これらはわかりにくいだが、それぞれ識別できる特徴を持つている。たとえば9は顎ひげをもつており、E8、F8にも連続してみられる2は、頭のうえに握つた手がのつている。少しぐらいわからないものもあつても、前後をつなぐ数や二六〇日暦や三六五日暦の一部がわかれば、それぞれきちんとした体系の暦が組みあわさつているので、計算から補うことができる。

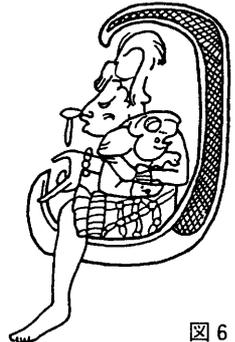


図 6
(Blood of kings, Schele and Miller, Kimbel Art Museum. より)

こうして読み取ったのが表1である。

二六〇日曆、三六五日曆、前後をつなぐ数、期間の終わりを表わす文字等の曆に関する文字ますを数えると、九六文字ます中三八もある。約四〇%である。残りがこの碑文の主内容を伝えていると考えてよい。

5 ラマツト6 シュルではじまる節の動詞はD5で、それは即位を表わす文字である。そしてC6aはその修飾文字である。即位を表わす文字、その修飾文字はF3、H2にもみられる。接字は月の文字といわれる文字素で、この場合「くし」という意味の動詞の接尾辞の役目を果たしている。D5にみられる文字素のなかには兎と思われる動物が描かれている。神とみられる女性が実際に兎を腕に

抱いている図もある(図6)。我々と同様、マヤ人も月に兎が住んでいると考えていたのだ、これもマヤ人の文字遊びのようである。D5では月の文字は半分しか書かれていないが、F3、H2では全部書かれて主字の下についている。

即位の文字の次にはそれぞれ即位した王がしるされている。D6はカンシュルとあだながついている王で、その一つ前のC6bは、その王によくつく文字である。その次のC7の文字は、さきほどふれたパレンケの紋章文字である。F4はその次の王、チャークで、G4はクツク王である。王には称号が前後につき、最後にパレンケの紋章文字が生起して句を形成している。

7 マニツク15ウオの節は、表1からわかるように、即位から1カトウンたった日である。即位後1カトウンの記念はH8からJ1にみられ、そのあとにクツク王を表わす句が生起している。そのあとには、クツク王の父であるチャーク王と母であるカアフ(またはアク)が生起し、

この長い文は終わる。

このテキストをまとめると、11カトウンのパカル王の御代からはじまり、カンシュル王、チャーク王の即位をしるした後、この碑文の主人公であるクツク王の即位、そして即位後1カトウンたった記念日に、チャーク王が父で、カアフが母であることをしるし、最後にそれより七日前の区切りのいい日9・17・13・0・0の日をしるし、ふたたびパカル王との結びつきを述べて碑文を締めくくっているのである。おおよその意味はこのようにわかるのであるが、いざ個々の文字の意味、読みはどうかとなると、まだ理解できない。これがマヤ文字解読の現状である。

壺の文字

最後に、碑文や、絵文書とはまた違った内容をしるした壺の文字をあげておきたい。壺の文字資料にも、碑文と同じように、王の即位や王族の名などをしるしたものもあるが、主となるのは、定型の

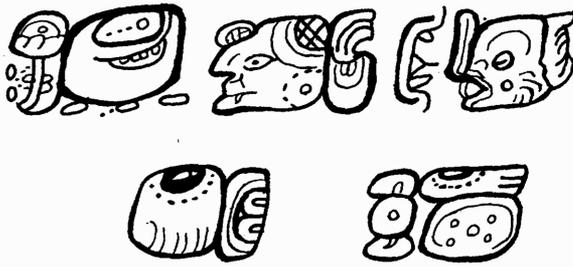


図 7

文字群である。壺によって生起する文字に若干の差はあるが、かなり長い順序の定まった文字群のなから、その壺に必要なものを選んだようである。(写真13、図7)。これらの壺は副葬品として、王族の墓に埋葬されたものであり、その一連の文字群は、おそらく、葬送儀礼に関係する歌とか詩の類であろう。

碑文の内容は、王族の誕生、即位、死、他の遺跡との交流など、王族の歴史が主である。壺は墓に埋葬されるもので、主となるテキストは、葬送儀礼に関する長歌の類であった。絵文書は、おもに神官が行なう二六〇日曆に基づいた占いのための書物のようであり、いづれも、マヤ社会の上層を占める人たちの、限られたテーマの資料である。マヤ文字は、他の古代文字と同じように、一般の人には無縁な文字であった。

メソアメリカのなかのマヤ

マヤ文明が栄えたメソアメリカには、アステカ文字やサポテカ文字など、いろいろな文字体系があった。しかしマヤ文字ほど進んだ体系には発達しなかった。マヤ文字がメソアメリカのその他の地域に採用されてもよいようなものであるが、そうならなかったのはなぜか。それはメソアメリカの歴史を考えるうえで、大きな問題の一つである。

マヤ社会と異なる文化をもった社会と

の交流は、古代から絶えることはなかった。古典期時代もつとも大きな影響をマヤ社会に与えたのは、メキシコ高原の巨大都市テオティワカンである。五世紀前後に、テオティワカンとマヤの中心であるティカルとの交流を物語る遺物がティカルで出土している。文字をもつ社会は一般に高度であり、文字のある社会から文字のない社会に影響は伝わるというのが普通であるが、この場合は逆で、その当時テオティワカンには、マヤ文字のよう発達した文字はなかった。マヤ文字は、あまりにマヤ語に根ざした体系であったため、他の言語を用いる人々には使いこなすことができなかったであろうか。もしそうなら、マヤ語とマヤ文字を考える時に、それは大切な視点となるであろう。

■ やすぎ・よしほ 1950年生まれ。国立民族学博物館助手。著書・「マヤ文字を解く」(中公新書)、論文・「マヤ文明」、「マヤ文字の分析」ほか。